

# 『聖書』とことわざードイツを中心にー

河崎 靖

## 1.

ドイツは、ことわざの数が多く他国に抜きん出ていると言われています（山川丈平（1975）『ドイツ語ことわざ辞典』白水社）。オランダのエラスムス（1466頃－1536年）やアグリーコラ（1494頃－1566年）の時代に続いて、ザイラー（J.M.Sailer）の『ちまたの知恵 Die Weisheit auf der Gasse』（1810年）・ケールテ（W. Körte）の『ドイツ人のことわざとことわざふうの慣用句 Die Sprichwörter und sprichwörtlichen Redensarten der Deutschen』（1837年）・ジムロック（K. Simrock）の『ドイツのことわざ Die deutschen Sprichwörter』（1846年）が出版されています。中でも、デュリングスフェルト（Ida & Otto von Düringsfeld）の『ゲルマン語およびロマンス語ことわざ集 Sprichwörter der germanischen und romanischen Sprachen』（1872-1875年、全2巻）および ヴァンダー（K.F.W. Wander）の『ドイツことわざ辞典 Deutsches Sprichwörterlexikon』（1863-1880年、全5巻）は、ことわざ学（Sprichwörterkunde）を代表する大著であります。近年のものでは、マッケンゼン（L. Mackensen）の『引用句・慣用句・ことわざ Zitate, Redensarten, Sprichwörter』（1973年）や ヘルヴィヒ（G. Hellwig）の『引用句とことわざ Zitate und Sprichwörter von A-Z』（1974年）があります。

さて、ことわざにつきましては、ベーコン（Francis Bacon）が「民族の天分、機知と精神は、そのことわざの中に見出される」（The genius, wit and spirit of a nation are discovered in its proverbs.）と述べ、また、ヘルダー（Herder, J.G.）が「ことわざは民族の考え方を映す鏡である」（Sprichwörter sind der Spiegel der Denkart einer Nation.）という捉え方をしていますように、ことわざには、民族の精神・言語文化が反映されており、その中には人類の知恵がつまっていると言えましょう。言葉のあやによりイメージをふくらませ、言いたい内容を強く印象づけることができ表現ができ、併せてその表現力が豊かになります（例えば宗教の本質をえぐったとされるマルクスの有名な名句があります：「宗教は民衆の麻薬である（Die Religion ist das Opium des Volks.）」）。このイメージというのは言語が異なれば、それに応じて違はずですから、この相異を比較対照するという観点も生まれます。このように、ことわざを通して多彩な文化に触れ、複数の言語の間に見られることわざの共通点・相違点を描出することで、比較ことわざ

学 (vergleichende Sprichwörterkunde) もまた可能になってくるであります。

確かに、比較言語学など、既に学問領域として確立し、その方法論も不動のものとなっている学術分野もあれば、比較言語学を模した比較神話学なり、比較言語学ほどは、そのアプローチ法が整っていない学問分野があったりと、「比較〇△学」には、学問としての成熟度に程度の差が割と大きく反映されるのが現状です。この意味で、比較ことわざ学という領域は、その意義、また人々を惹き付けてきたその魅力に関し、まだまだ発展途上の学問分野と言わなければなりません。それでも、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺を含んだことわざには、人々の生活体験、社会規範などが織り込まれており、ことわざの含蓄には、文化をこえて人類一般に共通するような知的体系を導き出せる可能性を感じさせます。例えば、「情は人のためならず」・「蒔かぬ種は生えぬ」・「猫に小判」・「馬の耳に念仏」など、どの文化にもありそうな発想が込められていますし、聞く人の共感を得て次第に常套句として定着していくプロセスにも、文化の差異をこえた共通性を捉えることができそうに思われます。

これまでも、異なる文化圏の多くのことわざを比べ合わせ、それらの類似点・相違点を明らかにしようとする先行研究は少なからずありましたが、非常に多面的な顔をもつ、ことわざを総合的に扱った本格的な研究成果は従来あまり生み出されてきませんでした。文化依存の高い民間伝承としてのことわざをさまざまな観点から考察する、ことわざ学 (Paremiology) には一定の存在価値が認められますが、単なる意味・用法の記述・分類に基づき、その上にさらに、文化の特質、民族性などを論じる比較ことわざ学を確立するには、方法論的アプローチの検討から始めて、取り組むべき課題が少なくありません。そもそも、ことわざの定義そのものが難しいという点に関してよく引用されるのが次の一節です。

The definition of a proverb is too difficult to repay the undertaking. (Taylor 1931:3)

「ことわざの定義を行うのが極めて困難である」

確かに、同じように定型表現ではある慣用句とことわざの違いは何か、あるいは、ことわざを特徴付けるとされる韻律・口調 (リズム)・比喩性をどう位置づけるか等、ことわざ学に残されている問題点は多くあります。いずれにせよ、(比較) ことわざ学の目標は、文化をこえて、ことわざの特質を解明することであり、言ってみれば逆説的かもしれませんが、ことわざの定義に関する文化依存性の問題も比較ことわざ学の重要な課題になってきます。世界各地から収集したデータを整理・分類し、ここから普遍的なことわざタイプを想定し、いわば人間の思考の元型を導き出せるか否かという問題であります。異なる地域から集められた類似のことわざを包み込むような共通のグローバルタイプにアプロ

一斉するという枠組みのことです。

## 2.

諺は従来、名句・慣用句・格言・故事・成句などと明確に区別されることなく用いられることが多くありました。この点に関しては、これらの術語全体をカバーする包括的な観点から次のような図式の分類で捉えておくといいかと思います（宮地 裕 1999：『敬語・慣用句表言論』明治書院）。

成句の下位区分として

### （1）格言・ことわざ

歴史的・社会的に安定した価値観をもつ。

例（格言）：「勝って兜の緒をしめよ」・「損して得とれ」など。

例（ことわざ）：「寝耳に水」・「売り言葉に買い言葉」など。

### （2）比喩的慣用句

#### ① 直喩的慣用句

例：「夢のよう」・「わらにもすがる思い」など。

#### ② 隠喩的慣用句

例：「肩を持つ」・「頭に来る」など。

### （3）連語成句

例：「息を殺す」・「恥をかく」など。

ことわざは民衆の間で自然発生的に生まれたものであるのに対し、一般に名句と言われているものは、その作者が知られている（例えばゲーテの「外国語を知らない者は自国語についても無知である（*Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eignen.*）外国語を知らない者は母語についても何も知らない」など）という点で区分することができます。このことわざ（*Spruchwort*）と名句（*geflügelte Worte* 「翼の生えた言葉」）を併せて引用句（*Zitat*）と呼ぶことができます。

例えば文学作品には、『聖書』のことわざを巧みに取り込んだ表現が随所に見られます。『聖書』の「箴言」(31:10)にある *Wem ein tugendsam Weib beschert ist, die ist viel edler denn die köstlichsten Perlen.* 「誰か賢い女性を見出すことができればその価値は真珠よりも尊い」を用いて、ゲーテは『ファウスト』第一部(3155-56)で、

*Das Sprichwort sagt: Ein eigener Herd,*

Ein braves Weib sind Gold und Perlen wert.

「ことわざによると、自分のかまどとよい女房は金と真珠の価値がある（直訳）」と述べています。ここには（『聖書』とは関係のない）別のことわざ（*Eigener Herd ist Goldes wert*. 「我が家にまさるところなし」）も盛り込まれています。つまり、2つのことわざが組み込まれていながらも、*Das Sprichwort sagt* 「ことわざによると」と断つてもあり一読して気がつきます。概して（『聖書』に関わらないものであっても）文学作品の中で、ことわざが使われることは少なくありません。例えば、リール（*W.H.Riehl*）の『漂泊の乙女』（*Das Spielmannskind*）の中で、

*Sie hatte aber gehört, daß Straßburg die reichste und schönste Stadt im ganzen Elsaß sei, wo man für Geld und gute Worte alles haben könne, was das Herz begehrt, und darum eigentlich Silberstadt heiße, [...].*

「彼女はシュトラースブルクがアルザス地方全体で最も豊かで美しい街であり、ここでは金と弁舌があれば、ほしいものが何でも手に入るところなのだ、だから元来、銀の都と呼ばれているのだと聞いていた」

という具合に、広く流布していることわざがそのまま用いられているケースもありますし、また、次のゴットヘルフ（*J.Gotthelf*）の『農夫ウーリが幸せになる話』（*Wie Uli der Knecht glücklich wird*）のように、一般に知れ渡っていることわざを変形して引用する場合があります。

„Es ist nicht immer alles *Glück*, was glänzt“, sagte sie halblaut und ging zur Türe hinaus.

「よく見えてもすべてが幸福とは限りません」と彼女は小声で言って、戸口から出て行った。

これは、*Es ist nicht alles Gold, was glänzt*. 「輝くものが必ずしも黄金ではない」ということわざが下敷きになっている表現であります。

同様に、『聖書』が出典となっても、敷衍されたりしていることわざも少なくありません。例えば、「マルコ」(16:16)の「信仰は人を幸福にする」という言い回し

*Der Glaube macht selig*. 「信仰は人を幸福にする」

に、さらに **und der Wein fröhlich** を加えて、

**Der Glaube macht selig und der Wein fröhlich.** 「信仰は人を幸福にする、そして酒は人を愉快にする」

といったように「そして酒は人を愉快にする」という表現を付け加えて、風刺をきかせたりすることがよくあります。

ところで、ドイツの民衆レベルで古くから浸透したことわざの中には、外国より借用した後にドイツ語化された転来のことわざが多くあります。こうしたことわざの源泉としては ① ラテン語・② 聖書 です。ラテン語や『聖書』に基づくことわざは西欧に共通な表現が多く、例えば、**„Niemand kann zwei[en] Herren dienen.“**「誰も二人の主には仕えることはできない」は、『新約聖書』の「マタイ」6:24 に由来し、英語では **„No man can serve two masters.“** と言い、フランス語では **„Nul ne peut servir deux maître à la fois.“** 「誰も同時に二主には仕えられない」と言いますが、これと同様のことわざがイタリア語・スペイン語にもあります。ただし、ドイツ語のことわざと類似のものがラテン語や『聖書』にあるからと言っても注意深い観察が必要な場合もあります。例を挙げますと、ドイツ語のことわざ **„Wer andern eine Grube gräbt, fällt selbst hinein.“** 「人を呪わば穴二つ」は、『聖書』「箴言」26:27 の **„Wer eine Grube macht, der wird hineinfallen.“** 「穴を掘る者は自らこれに陥る」に非常に似ていますが、これはドイツで独自に発生したもので、形式上、偶然に類似の形をとったものであります。

### 3.

『聖書』の背景とも言える古代オリエントでは、もともと古くから、寓話や教訓詩あるいは、ことわざ・謎かけ等、さまざまな形式を用いて人生や社会の諸問題に解答を与えようとする文学が数多く伝えられていました（こうしたジャンルは一般に知恵文学と呼ばれる）。古代イスラエル人が残した『聖書』にも随所に知恵文学的な要素が認められ、例えば「箴言」・「伝道の手紙」・「ヨブ記」には格言・名句めいたものがたくさん見出されます。『聖書』の知恵文学はそれぞれ個性的ではありますが、神によって創造された世界の秩序への人間の関わりという問題が主題化されているという点では共通していると言えます。

『聖書』のことばの中でもことわざは、言語文化の作用・影響が民衆レベルで息づいていることを示す好例であると言えます。たとえキリスト教のバックグラウンドが背景にあるとしても、言語文化の粋とも言えることわざが

人々の間で浸透し、民衆の口をついて出てくるまでに深化している何よりの証しと言えるでしょう。先人の知恵を育むことわざを今日の一般の人々が受け継ぎ、さらに育て上げていっているわけです。

さて、ことわざのうち、最古のものは『聖書』の「箴言」(別名「格言の書」、紀元前 10 世紀) に始まります。ソロモンをはじめとする賢人が残した三千にも及ぶ格言集のことです。これに続くのは、エラスムスが出版した「ことわざ集」(Adagiorum Collectanea, 1500 年) です。例えば、ラテン語の *Festīnā lentē* 「ゆっくり急げ」(Eile mit Weile 「急がば回れ」) などが該当します。1534 年の Johannes Agricola の „Siebenhundertundfünfzig Sprichwörter“ (リプリントが次の画像、1971 年) の中には、*Rom ward in eynem jar nicht erbawet*. 「ローマは 1 年！で建てられたのではなかった」などが収められています。



西洋で、ことわざ(ないし名句)の出典の冠たるものは『聖書』です。今日、広まっている言い回しに関して、その起源が『聖書』にあるという場合が実に多くあります。

例：「人はパンのみにて生きるにあらず」(Mt. 4:4)

Οὐκ ἐπ' ἄρτω μόνῳ ζήσεται ὁ ἄνθρωπος, ἀλλ' παντὶ  
not by bread alone shall live the man but by

ἐπι ῥήματι ἐκπορευομένῳ διὰ στόματος Θεοῦ.  
every word coming out of mouth God

さらに、「時は金なり。しかし暇のたくさんある人はお金もたくさん必要だ」(Zeit ist Geld, aber wer viel Zeit hat, braucht viel Geld) など、ことわざ・名句をもじったもの (Wellerismus) もあります。また、Der Mensch lebt nicht vom Brot allein. 「人はパンのみにて生きるにあらず」に対して、スープも必要だ (クノール Knorr の広告) という類の表現も生まれてきます。



上の例 (人はパンのみにて) 以外にも、『聖書』の中には、ことわざ (的な言い回し) が数多く見出されます。私たちの口をついてくる名句の数々も実は『聖書』に由来するというものが少なくありません。例えば、「貴重なものも価値のわからない者には無意味である」という意味の「豚に真珠」も『新約聖書』の「マタイ」(7:6) がオリジナルです。

**マタイ (7:6)** : 「聖なるもの (神に捧げられた聖なる供え物) を犬に与えてはいけません。また豚の前に真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから」。

Μὴ δώτε τὸ ἅγιον τοῖς κυσίν, μηδὲ βάλητε τοὺς μαργαρίτας ὑμῶν ἔμπροσθεν τῶν χοίρων, μήποτε καταπατήσουσιν αὐτοὺς ἐν τοῖς ποσίν αὐτῶν καὶ στραφέντες ῥήξουσιν ὑμᾶς.

もともと、この言い回しの背景にあるのは、アラム語の言い回し「犬に何一つ

つけてやるな、君たちの真珠を豚の鼻先につけてやるな」であり、『聖書』（「箴言」11:22）の「きれいだが身持ちの悪い婦人を、雌豚の鼻の金の環とする」（美しいが、たしなみのない女は、金の環が豚の鼻にあるようだ）という言葉です（ことわざのうち最古のものは『聖書』の「箴言」に始まると見てよいでしょう）。

一般に、異邦人は「犬」にたとえられることが多く、犬は概してユダヤ人にとって不浄の動物です。「マタイ」7:6 は、厳格に律法的に生きているユダヤ人キリスト教の教会に由来する一節であります。端的に言うならば、異邦人伝道を抑圧しようとする動きであると見ることもできます。つまり、聖なるもの、すなわち、神に捧げられた供え物は、ラビの規則に定められてように、犬の前に投げることはしません。また、豚に向かって真珠を投げれば、豚はそれを食べることができず、怒り狂って、餌として真珠をやろうとした人を攻撃します。このように異邦人たちは、人が彼らに福音をもたらした時、伝道者たちに反対し、彼らの律法主義を攻撃し、割礼・食物規制・清浄に関する規則を破棄し、ついにはイスラエルを食いちぎるかもしれません。

#### 河崎 靖

1985 年、京都大学大学院文学研究科修士課程（言語学専攻）修了。大阪市立大学講師、京都大学総合人間学部 助教授等を経て、2009 年より京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門はゲルマン語学、言語学。著書に『ゲルマン語学への招待—ヨーロッパ言語文化史入門』『ドイツ語学への誘い—ドイツ語の時間的・空間的広がり』『神学と神話—ドイツ文化誌の視座から』『ドイツ語で読む『聖書』—ルター、ボンヘッファー等のドイツ語に学ぶ』『ボンヘッファーを読む—ドイツ語原典でたどる、ナチスに抵抗した神学者の軌跡』等。